

↓大佐 中沢勝三郎。

編成当時の師団幕僚

参謀 大佐 北川秀明、少佐 阿久津憲章、

少佐 星 光久、少佐 市川正七、

少佐 北村二郎、

高級副官 少佐 藤田相吉

歩兵第八十一旅団

旅団長 少将 見城五八郎↓少将 野口進

独立歩兵第一八一大隊 大佐 里宮隆文

同 第一八二大隊 少佐 大村忠孝

*同 第一八三大隊 大隊長 大佐 牟田元次

(勤第一〇六六三部隊)

同 第一八五大隊(中佐 杉山鉄次郎)、

旅団通信隊、同作業隊、

歩兵第八十二旅団長 少将 河島修

独立歩兵第一八四大隊 中佐 二宮昇

独立歩兵第一八六大隊 大佐 沖田一夫

独立歩兵第三五八大隊 少佐 笠間哲行

独立歩兵第三五九大隊 少佐 大森富雄

旅団通信隊、同作業隊、

師団砲兵隊、同工兵隊、同輜重隊、同通信隊、

同野戦病院、同病馬廠、同防疫給水部、野戦高射

砲第七十七大隊、

*野戦照空第二大隊、

特設機関銃第十三、同第十四、同第十五大隊、独

立戦車第八中隊。

鎌倉丸沈没

比島沖漂流五日間

石川県 廣谷 良信

昭和十八年三月八日、第六期普通科水中測的練習生課程を終了し、第五十四駆潜隊「第二昭南丸」乗組み・呉海兵团仮入隊を命ぜられた。機雷学校を後にして単身で呉海兵团に仮入団し、第五十四駆潜隊はマカッサルを基地として行動していることを知った。

四月八日、同期生七名と共に仮入団者は「鎌倉丸」

に便乗を命ぜられた。「鎌倉丸」は当時日本最大型の客船と聞いていたが、同期生七名は初めての船旅で任地に向かう希望の第一歩を踏み出した。抜錨始動し、同室の先輩から、明朝、神戸に着く予定だと聞かされた。本船の幹部から「本船は対潜水艦用水中聴音機を装備したが、専門的教育を受けたものがないので、水測の専門の過程を得た皆さんに目的地まで、水中聴音当直に協力してほしい」と申し入れがあった。

早速、即応できるように性能や特徴等に少しでもなれるため、聴音室に集まり各自レシーバーを着けて聴音操作を行い、日ごろの訓練が発揮できるよう、責任の重大さを実感した。神戸で四〜五日碇泊、多数の便乗者又は積荷があり船内は終日多忙であった。

夕刻、神戸港出航。翌朝、関門海峡通過。私たちの聴音当直協力も本格的に始まり、佐世保に寄港一泊する。

翌日出港後、備砲の係員から「本船は佐世保出港後、朝鮮の西沿岸を北上、その後支那側より南下して極力潜水艦との遭遇を避けながら高雄に向け航行する。海

水の色が黄色になるのは黄河や揚子江などから流れ出る河水の色のためである。右真横の遠く見える小さな島は、舟山群島東端の島で、現在は上海沖を南下中」と説明してくれた。

その後、高雄・マニラに寄港し、便乗者の乗下船があった。夕食後、上甲板の急造舞台で便乗中の各慰問劇団による歌謡、漫才などの競演が行われた。船内の劇場舞台では日本舞踊が行われ、にぎやかな一時であった。

四月二十七日早朝、護衛艦なしの単独船でマニラをバリクバパンに向けて出港した。海上は至極平穏で、機関の音も軽く快適に走航、左に見える島がフィリピンの激戦地コレヒドール島であると聞き、往時を偲びつつ南へと白い航跡を残し順調に航行した。各員は一時間ごとの聴音当直に協力しながら、近づく新任務地の希望を語りあっていた。

午後十時に当直協力後、船室に帰り、腹巻と裸だけの軽装に毛布を体に掛け横になった。昼間睡眠が少なく心地よく眠りに入っていた。その後、突然「ガン」

という甲高い大音響と共に体が飛び上がり、一瞬にして安眠が破れ、何事が起きたのか、常夜灯は消え室内は真っ暗闇、同室者の声も聞こえず、動静は一切分からず、これは重大な事故か、大爆発で、機関故障が起きたのかと一瞬息を殺した。

通路から悲鳴や叫び声が沸き起こり、その直後二回目の大音響で、再び大きい悲鳴や叫び声が聞こえた。これは大事故が発生したと直感した。着衣も履物も取らず素足のまま通路にとび出したところ、真っ暗な通路には多数の人たちが悲鳴をあげ、上甲板に上がる階段に向け殺到していた。もう室に引き返すことはできず、幾度か転びそうになりながら迷路のような通路や、複雑な階段を次々と上り、船尾部より後部甲板に出ることができた。

甲板上には多数の人々が右往左往しており、最悪の事態である。乗船時、説明された船の中央部煙突近くに救命筏があることを思いだし、中央部に向けて走り出したが、船体が船尾側に傾斜して走行困難で意のままにならず、後部のマストは付近を通過した直後、上

甲板まで浸水してきた。

もうこれ以上前にも後にもいけず、無意識にタラップの手摺りにつかまったが、アッという間に侵入してきた渦巻の中に圧流された。一呼吸の間に体や手足を大きく動かしたところ、幸運にも浮き上がることができた。辺りを見回すと、既に船影は見えず、暗い海面上に点点と泳いでいる人の頭が見えるだけの、悪夢にとりつかれたような海面である。

立ち泳ぎをして我にかえると、身に着けているものは腹巻だけで褌はなく、今後の不安がこみあげてきた。幸いにも海水の温度が暖かく、風呂に入っているような暖かさ、海上も平穏である。体力の消耗を少なくするため、小さな木片の浮流物の中から長さ約一・五メートル幅約三〇センチの板切れを得て、これにつかまらながら浮流していた。

三十分ほど過ぎたころ、真っ暗な海上を「ゴウ、ゴウ、ゴウ」と、軽いディーゼルエンジンらしい機関音が聞こえ、次第に音が大きくなった。その方向を注目していたところ小さく黒影が見える。この夜半、広い

大海原に早くも救助船が来るとは、どんな手配ができているのか。この船は無灯火で、ますます接近して行くではないか。本船はマニラから護衛船なしの軍船で航行しているはずで夢のようである。二〇三〇メートルほど接近した船に、数名の者が大声で「助けてくれ」と叫んだのが船側に聞こえたかのように、急に転舵し、こちらに向かつて横向きに停止した。

スマートな大型潜水艦である。今まで大声を張り上げて救いを求めていた私たちは、急に静かになり動静を見守った。

我々をひどいめに合わせた敵の潜水艦であることが分かった。私は早く去ってくれるように祈りながら板切れの下に、できるだけ長く潜った。板切れの脇から顔をだして深呼吸し、再び潜るのを繰り返し続けた。長時間に感じたが約四〇五分くらいか、目前に漂流していた潜水艦は再び航走反転して遠ざかった。一難去った海面一帯には多数の漂流者が目撃された。皆不安な複雑な気持ちであったと思う。

約一時間ぐらいいも過ぎたであろうか、東の水平線よ

り太陽が出て次第に明るくなったころ漂流者が半径約五〇六〇メートル範囲内に分散しており、その中に救命ボート二隻が発見された。各隻に四〇五〇人ほどで周囲から持ち上げ、ボートに一人が乗り海水を汲み出し、二隻とも損傷箇所もなく正常に浮上した。周囲に排水を待ちかまえていた多数の者が集中して乗船したので、私は「これは無理だ」と断念し、再び先程の板切れにつかまって漂流していた。

付近に救命胴衣が浮遊しており、早速板切れに縛り、浮力を増し漂流していたところ、三人グループで漂流している集団に接近接触して一緒に漂流していた。リーダーと思われる方が「救命胴衣につかまっているが、それは時間の経過に伴ない内部に水が侵入して浮力が次第に減退するから、今のうちになんとかしなければ駄目だ」と忠告をいただき、「我々と一緒になった方がよい」と誘われ、加えてもらった。

このグループの浮材物は上甲板に積んであった角材や敷き板など数本を束ねたもので、相当の浮力があり、私に加わった後にさらに新顔が一人加わり総勢五人に

なった。一人で漂流しているよりも、多数であるため一安堵してあわただしい一時が過ぎた。

辺りを見回したところ、着衣の無いのは私だけで他の方は下着類は着衣しており、私は今後が思いやられた。その後会話が始まり、腕時計が二時十五分で止まっている。これが潜水艦にやられた時刻だと、また別の者は今度は右腕をあげて人差し指と中指を揃えて口元にあて、タバコを一服吸いたいなど、遭難時の状況や、あと何時間で飛行機や船が救助に来てくれるのか、夕方までは必ず救助に来てくれるだろう、などの話で、今後迫ってくる不安や恐怖をだれが予想していたであろうか。

太陽が真上を過ぎ、気温も上昇し空腹の苦痛など過ぎたころ、リーダー格の方が皆に向かって喉が乾いたが、海水は塩辛くて駄目だ、小便を飲むではどうかとの案を出した。全員が一時浮板材から離れ、浮力に負担をかけない状態にして、実行者が中央部に中腰で体を安定にして、短靴を斜めにして踵部に放尿して素早く口に当てて飲む方法で、発案者が最初に行い、続い

て行ったが、いずれも満足には程遠い顔に見えた。三人目に同じ要領で私が行ったが量が少なく、色も赤く一氣に口に入れ飲み込んだ。思ったより粘り気や体臭のような嫌な匂いが強かった。

昼間は太陽の直射を受け頭部は暑く、ただ一つ身に着けていた腹巻を頭に乘せ、肩から下半身は水面下に沈め、また夜間の気温はだんだんと下がるが、水温の変化は余り無いので、昼間と同じく腹巻を頭の上に乗せて放熱を防ぎ体温を保つように努めた。

真下の海水の色も真上の空の色も共に真っ青で、なんともいえぬ不気味さを感じた。空や水平線を眺めながら救助に来てくれる希望をもって十数時間待ち続けたが、太陽が西に傾き日没近くなると、希望も薄らぎ会話も途絶え勝ちになった。

長い不安な夜に入り、明日の日の出が待ち遠しく無事を祈る気持ちになった。今日も長い一夜が過ぎ、太陽が昇り海上は前日同様平穏である。昨日は近くに分散していた二隻のボートをはじめ、漂流者のグループの数か海流によってか広範囲に分散して視界内に認め

ることができる数は減少しており、自然の威力に驚いた。また、夜間は月夜ではないため数多くの星がきれいに輝いていた。

暗い夜が明けたら、だれかが今日は二十九日で天長節（天皇誕生日）だと話しかけた。天長節の歌や君が代、愛国行進曲など皆で合唱したが、いずれも長続きせず途中でたち消えてしまった。互いに声を掛け合ってもそれに応ずる返事も次第に少なくなり、先日と同様、空と水平線を眺めて救助を待ったが今日も期待はずれで、再び長い夜を迎えた。星空の状態や、星の位置などは先夜と同じ、時間経過によるその運動の変化で夜明けまでの時間を予測できるようになった。

三日目も相変わらず海上は平穏であったが、疲労やあせりがつるばかりであった。今日も太陽が西に傾いた。次の日も相変わらず海上は平穏で、昼間は暑く、夜明けになると寒く身が震える程であった。午後三時ごろか、突然だれかがあれは何だと叫んだ。連日の疲労で垂れていた首を持ち上げたところ、水平線上に黒い入道雲のようなものが、もくもくと沸き上がり空一

面が暗くなった。一瞬冷風と感じたが次第に遠ざかった。

また、太陽が水平線上に見えるとき、水平線に黒い雲が平たく見えるとだれかが「ああ島が見える、あれはきっと台湾だ、我々は陸地に近づいている。きっと数時間後には救助船が必ず来る」と歓声を挙げるが、太陽が水平線を離れると陸地に見えたものは完全に消滅してしまうことが二、三回あった。また昨日は意外に寒かったので、我々は北に向かって漂流している。

太陽が昇ると「富士山か沖繩が見えてくるからしっかり見張りしよう」と言いもした。しかし、太陽が頭上を過ぎると、残念ながら期待はずれであった。

また、ある者は昨夜は比較的暖かかったので、我々は南支那海を通り、赤道付近を漂流していると想像した意見を口走った。

今日は五日目、相変わらず海上は平穏が続いている。ポート二隻をはじめ、筏や漂流物につかまっていた多数の組が、日数の経過と潮の流れによって広い範囲に分散していった。五日目の今日確認できるのは、遠く

のわずか一〜二組だけになり、心細さはますますつのるばかりであった。身は流れに漬かりっぱなし、そのうえ睡魔に襲われるので、体の安全を保つのが精いっぱい、一瞬の油断も許されない。

さらに、食物、飲物は一切なく体力の消耗衰弱も限界に達した。視野も狭くなり顔面は太陽の直射と潮焼けでヒリヒリと痛み、特に下半身、両股、膝の裏側の皮膚は爛れ腐り、皺状を呈してきた。さらに浮体材による切傷が拍車をかけ、最悪の運命が来るのは時間の問題と覚悟を決めなければならなかった。

今日は五月二日、昨年の五月一日、満十五歳二カ月の若年で、祖国の興廢、世界、東洋の平和繁栄を担う希望に燃え海軍に入籍して満一カ年が過ぎた。海兵団や学校での熾烈な猛特訓や努力が何の成果を得ることもなく水泡と消えるのか。また、潜水艦に対して海軍初の期待された第一期少年水中測的兵の初陣がこんな始末になり、水漬く屍となるのは残念で、死んでも死に切れない思いが胸いっぱいであった。

今日も太陽が西に傾き、あと一〜二時間で暮れよう

としたとき、だれかが震えるような声で「あれは船だ」と指を差して叫んだ。今までだまり込んでいた者が一斉にその方向に注目した。太陽の光を背にしたマストや甲板上の構造物がはっきりと望遠でき、だんだんと近づいてくる。軍艦ではなく商船である。リーダー格の人が今後の方針について意見を求めていた。二、三の発言はあったが、私は気力もなく聞くだけである。内容は、「我々は五日間漂流しているので赤道付近に達していることもある。この船は連合軍の武装商船であるかもしれない。最悪の時は覚悟を決めよう。船影が次第に大きくなり重大な事態が目前に迫る。結果は救助してもらおう」ということで一致した。

だが、木片に白い布切れを縛り目印として掲げたが、短時間で日没となり再び暗夜の星空になってしまった。船影は視界から消え、あとはすべて時間が解決してくれるだろうと、次の展開を待つことにした。

約三十分後、だれかが「黒い物が見える」と言った。それを見ると四〜五〇メートルほどまで接近停止した。いよいよ来るべき時が来た。だれもが声も出さず静か

に息を殺し固唾を飲んでいた。日本船であれば救助してくれるが、敵の武装船であればどうなるか、複雑な選択を待った。

一隻の手漕ボートが接近、さらに数メートル手前で一部權を納め近付いた。その瞬間、浮体の材木がくずれ不安定となり、一瞬溺れそうになったが、氣力で引き直り、両手を差し出したところタイミングよく、引き揚げられ、安堵した。

その後の記憶は全くなく、幾時間か過ぎたころ、下半身が焼けるような熱さと、激痛を感じて目を覚ました。薄暗い照明の下で、氣付け薬か、氣付け酒のようなものを一口飲ませてもらい、室の片隅で厚い布を掛けて休ませてもらった。日本船に救助されたのだということで、全身の圧迫感が取れ、興奮を感じたが、そのうちに熟睡ができた。

目を覚ましたが、室内には人影なく、扉の隙間から強い太陽光線が差し込んでいた。這うようにして上甲板に出たところ、甲板上には多数の漂流者が収容されておおり、私は漂流中も身に付けていた腹巻もなく全く

の素っ裸の姿そのままであった。

何日ぶりかで多数の人々の姿に接し、新鮮な空気を吸い氣力をもち直した。握り飯をもらったが口の中が乾き、荒れていて水分が無く食物は受け付けず吐き出した。その後しばらくしてから部屋に帰り、熟睡して目を覚ましたところ、機関の振動音も無く静かである。上甲板に出たが人影がなく不振に思ったところ、乗組員の方からこの船は今朝入港して大部分の方は上陸しているとのこと、両脇を抱えられ下船。縞模様の中ズボン半袖衣の支給を受けて宿舎に向かった。

三〜四十人ほどの人がおり、私たちは早速、傷や皮膚の腐蝕個所の治療を受けた。食物は午後になっても一切受け付けず、ついに四つん這いや身動きもできなくなり、夕方別棟の臨時病室に運ばれた。リンゲル注射などの治療を受け熟睡して翌朝、目を覚ましたところ、空腹を感じ食欲がわき、一週間ぶりに米粒の重湯にありついた。その後次第に食欲も旺盛になり、体力や傷の回復に努めたところ二〜三日で歩けるほど回復した。

転動先の聴取を受けたが、機雷学校で渡された関係書類がなく、第五十四駆潜隊の所在地の確認ができないので、この地で傷の治療や体力の回復に専念するよう指示された。この地はフィリピン南端の島ミンダナオ島西端のザンボアンガである。私たちを救助した船は特設砲船「木曾丸」であると知らされた。その後マニラ、昭南、ジャワなど方面行きのが相次ぎ寄港し、その都度転動先のわかっている者は便乗し、残っている者も次第に減った。五月十七・八日軽巡洋艦「大井」が寄港したので便乗、約半月間いろいろお世話になった思い出のザンボアングの地を後にした。

便乗中に第五十四駆潜隊の所在がマカッサルと判明し、マカッサルにて下船したが、「第二昭南丸」は行動中のため第二十三特別根拠地隊に数日間仮入隊後、五月二十七日「第二昭南丸」が入港したので着任、機雷学校を出てから約八十日余の赴任途中の生死の境をさまよった旅であった。

舞鶴、呉海兵団、機雷学校など今までの一年有余、苦楽寝食を共にした同期生とは再会できず、あの当時

あと数日で各自の任地に着任ができたのに残念で、胸の痛みを感じ、後ろ髪を引かれる思いである。

今なお、ミンダナオ島沖の深海に眠る乗組員、便乗者多数の犠牲者を偲び、心からご冥福をお祈りしている。

【解説】

「鎌倉丸」諸元

船種	旅客船	総トン数	一七・五二六トン
長さ	一七〇・六九メートル		
主機	ディーゼル	二基	一五・五〇〇馬力
速力	十八ノット		
竣工	昭和五年三月十日		
建造所	横浜船渠		
徴用種目	海軍期間傭船		
遭難日時	昭和十八年四月二十八日	午前二時十分	
遭難地点	比島パナイ島ナソ岬の西方約五マイル		
頃	北緯一〇度二五分	東經一二一度五〇分	

(推定)

遭難状況

マニラよりバリクパンへ向け航海中、

敵潜水艦の雷撃を受け、四月二十八日午

前二時十分ころ沈没

搭載物件

便乗者二五〇〇人、車両その他

船団名

なし。僚船なし。護衛艦艇なし。

「日本郵船戦時戦史」上巻より

「鎌倉丸」遭難は、昭和十八年四月二十八日とある

が四月三十日には「第五恵比寿丸」「第十二昭南丸」

第五監視艇「明神丸」が沈没している。また、二十三

日には第三十九哨戒艇「蓼」が沈没している。

大東亜戦争中、喪失した四千トン以上の大型船舶の

船名、屯数、沈没年月日は次のようである。

船名 トン数 沈没年月日

安土山丸 六、八八六 一九・一〇・二

愛宕丸 七、五四二 一九・一一・二八

秋川丸 五、二四四 一九・四・二七

浅間丸 一六、九七五 一九・一一・一

亜米利加丸 六、〇六九 一九・三・六

あかつき丸 一〇、一一〇 一八・五・二八

あとらす丸 七、三四七 一九・一一・四

あとらんちっく丸 五、八七二 一九・三・三〇

宇賀丸 四、四三三 一九・八・二一

宇洋丸 六、三七六 一八・一二・二一

延寿丸 五、三七四 一九・八・四

い号旺洋丸 五、四五八 一九・一〇・二〇

香洋丸 五、四七一 一九・二・二三

鎌倉丸 一七、五二六 一八・四・二八

甘井丸 四、八〇四 一九・六・二五

錦州丸 五、六〇六 一九・六・一七

黒龍丸 六、一一二 一八・七・三

国陽丸 四、六六七 一九・三・一三

国華丸 五、三九六 一九・九・八

興新丸 六、五三〇 一九・八・九

廣進丸 五、四八五 一九・一・二二

桑港丸 五、八三一 一九・二・一七

志どにい丸 五、四二五 一八・一一・二八

龍田丸	武豊丸	武津丸	台東丸	泰南丸	大龍丸	大天丸	錫蘭丸	聖山丸	青南丸	西江丸	杉山丸	じよくじゃ丸	神州丸	彰山丸	松祐丸	松運丸	春天丸	寿洋丸
一六、九七五	六、九六四	五、九四九	四、四六六	五、四〇七	四、九九四	四、六四二	四、九〇五	四、二三二	五、四〇一	五、三八五	四、三七九	六、四四〇	四、一八二	五、八五八	四、四〇八	四、三九六	五、六二三	五、四五七
一八・二・八	一九・八・二一	一九・八・二三	一九・五・二五	一八・二・二六	一九・二・一九	一九・二・二四	一九・二・二七	一九・二・二三	一九・一・三三	一九・二・〇・一	一九・二・一・二五	一八・五・二五	一八・二・〇・二三	一八・六・二六	一九・一・一八	一九・六・一一	一九・一・一七	一九・三・七
ばたびや丸	花川丸	白陽丸	日瑞丸	第二日新丸	日鑛丸	南満丸	夏川丸	鳥取丸	豊川丸	豊岡丸	東裕丸	東豊丸	東星丸	東崗丸	千代丸	辰南丸	辰浦丸	静野丸
四、三九二	四、七三九	五、七三二	八、五八四	一七、五七八	五、九四九	六、五五〇	四、七三九	五、九七三	五、一三三	七、〇九七	四、五三二	四、七二六	五、四八四	四、一八〇	四、七〇〇	六、四一七	六、四三〇	六、九六〇
一九・六・二二	一九・三・一七	一九・一・〇・二五	一九・一・〇・一九	一八・一・一・三〇	一八・一・一・二〇	一八・一・〇・二七	一九・一・一・一九	二〇・一・五・一五	二〇・一・七・五	一九・九・九	二〇・一・一・二二	一九・六・一	一八・二・二・二八	一九・一・〇・二二	一九・六・二	一九・四・一七	一九・一・一・二三	一九・一・一・二五

日高丸	五、四八六	一九・一・二〇
日張丸	六、五五〇	一八・四・一六
備前丸	四、六〇四	一九・五・二四
濱江丸	五、四一八	一八・六・二二
ふろりだ丸	五、八五四	一八・四・六
平洋丸	九、八一五	一八・一・二〇
北江丸	五、三八四	一八・一・一九
北泰丸	五、二二〇	一九・三・二七
北洋丸	四、二一六	一九・三・一七
ほるどう丸	六、五六六	一七・二・一
萬寿丸	五、八七五	一八・一・二九
満泰丸	五、八六三	一九・七・二六
美崎丸	四、四二二	一九・一・二四
美作丸	四、六六七	一九・四・九
美保丸	四、六六七	二〇・四・三〇
美山丸	四、六六七	一九・五・一四
山鬼山丸	四、七七六	一九・二・一七
山国丸	六、九二一	一九・一・一四
山幸丸	五、九四八	二〇・一・一六

山珠丸	四、六四二	一九・八・九
龍江丸	五、六二六	一九・八・四
麗洋丸	五、四四六	一九・二・一七
和山丸	四、八五一	一九・四・二六

第二十三特別根拠地司令部

昭和十七年三月十日、佐世保鎮守府聯合特別陸戦隊司令部を改編し、以来南西方面戦地戦務であり第一線で戦務甲であった。

一軍医の戦地の足跡

鳥取県 福島敏夫

昭和十六年七月、岡山大学稲田内科教室に勤務中再度召集令状がきた。召集部隊は、昭和十六年七月十六日、動員下令された、第百兵站病院（鷲第三九五一部隊）である。その編成管理は、姫路編成の第五十四師団が担当し、同年八月一日に関東軍第十五兵站衛生隊